

シテ味酢シ、春ノ末黄色トナル、故ニ紀州有田郡湯淺ニテ、ハルミカント云、夏ニ至レバ其皮微シ
黒色ヲ帶テ、煤ヲツケタルガ如シ、故ニ盧橘ト云、香味甘美ナリ、有田郡處々ニ多ク産ス、又村瀬乾
徳ガ南海包譜ニ曰、盧橘是柑類也、而曰之橘猶金柑有金橘之名、不嫌同類互呼也、

〔牛馬問〕菅氏が曰、盧橘とは何物ぞ、予○新井が曰、此物種類多し同名異種なるものも有、先は
本草の金橘といふものにして、世俗金柑といふ是なり、菅氏が曰、枇杷にあらずや、予が曰、文選
の註誤て枇杷とすること、綱目釋名に詳に辨有往て見るべし、然るに秘傳花鏡に、枇杷一名盧
といふは、選註を誤襲なるべし、菅氏が曰、まからは戴叔倫が湘南の詩盧橘花開楓葉衰の句解
すべからず、予が曰、此詩盧橘楓葉と一時に有を以て、諸説紛々たり、可解不可解ものは詩を解
の要也、又さらくと句意を軽く見るべし、叔倫湘南に在て東方の京に歸らん事をおもへど
も得ず、故に時去水流れて住まる事なきを歎せし也、よつていふ、我此湘南に來て、此水邊に遊
びしは、盧橘の花の開く比なりしに、今來て見れば、早楓葉の衰の時節也、如此月日は過るに、我
は都にかへらざる事やと解す、何の理屈に苦しまむ、菅氏晒

〔関田耕筆〕戴叔倫が盧橘花開楓葉衰といふ詩の三體詩に見えたる註に廣州記書云、盧橘皮
厚氣色大如柑酢、夏熟、土人呼爲壺橘、又増註盧橘卽枇杷也とあり、又正字通橘條を見るに、曰或
云、金橘盧橘也、蘇軾誤以盧橘爲枇杷、陶九成始疑之、以廣州之壺橘爲盧橘とあり、白香山の律詩
に、盧橘實低山、雨重棕櫚葉、戰水風涼とある對句をもてみれば、是も夏熟するものとす、然るに
和歌者流にて、盧橘の題は唯橘をよむこと流例にて、花を主とし、右の義には慚はず、たゞし其
中堀河院初度百首、神祇伯顯仲卿の歌に、吾園の花橘の花みれば金の鈴をならす也けり、とい
へるは、夏熟の説にあへり、又永徳百首に、此ころは實さへ花さへ同じえに並べて見つる軒の
橘、といふは、珍らしきよみやうとはいへど、世の常の橘、花落る時やがて少き實生れば不審